

先生特集について

東海の教育を直接支えて下さっているのは、ご存知の通り個性豊かな優れた先生方。そんな素晴らしい先生方をご紹介します、より深く東海を知っていただくという企画です。

前半：生い立ち～就職まで

中間：東海に来て～教員としての考え

後半：高フェスについて～父母懇活動・息抜き

かさゆき ひろふみ 笠行 裕文先生

中学数学科
東海父母懇教員代表
陸上部 顧問
岡山県井原市出身



小学校 小2～小6 書道教室に通う
スポーツ少年団で小4～卓球
周りに面白いと思われたかった

中学 卓球部
中2で素晴らしい担任の先生に出会い、
目が覚める

高校 生徒会長 書道部 極真空手道場に通う
書道部で尊敬する師(顧問)に出会い、
教員を目指すようになる

大学 一浪後、東京の大学へ 教育学部数学科
就職 一旦名古屋のメーカーへ就職
退職し、会社の先輩と起業する

転職 区切りをつけ、教員に転職
公立の非常勤講師をしながら、
縁あって東海へ

今年度から教員代表を務める笠行先生は、精悍な顔つきと、細身ながらも鍛え上げられた見た目とは裏腹に、非常に穏やかな語り口で、お話は終始ユーモアに溢れ

ていらっしやいました。生徒を思い浮かべた時の柔和な表情から、生徒思いで頼りがいのある先生であることも伝わってきました。普段はちょっとシャイで、父母にそっと寄り添ってくださるタイプの先生ですが、インタビューでは男気のあるお話や様々なおもしろ経験も語ってくださり、剛柔併せ持った素敵な先生でした。今年度から父母懇活動をコロナ前に順次戻していく中で、教員代表として、以前の活動を踏まえつつ、活動しやすい新しい東海父母懇を目指して奮闘されています。(取材日3/7)

一生い立ち

岡山県井原市出身(漫才師の千鳥のノブも同じで、弟は千鳥と同じ高校)。3人兄弟の長男。小学校の時は、いわゆる真面目で優等生タイプだったと思うが、単に怒られるのが嫌だったから。小5の時に、クラスで自分の発言がウケたことをきっかけに、周りから面白いと思われるようになりたい、ウケたら気持ちいい、という気持ちが芽生え始めた。

小2で自分から習字に行きたいと言い、小6まで続けた。スポーツ少年団で小4から卓球を始め、中学3年間卓球部に所属したので機敏な動きは得意。自慢っぽくなってしまいが、小学校の時の体育は目立ちたくなくて、少し手を抜いていたこともある。「できる」方で目立つのは嫌で、「面白い」という方で目立つことに憧れがあった。小さい時から田舎の野山で鍛えられ、おそらく体幹が強いのだと思う。今思えば命に関わるような危険と隣り合わせの遊びをしていたし、知らぬ間に体幹が鍛えられて、相撲大会では手を抜いても勝つくらいで、負ける気がしなかった。

小学校では塾に通っている子は1人もいなかったし、中学受験をする子もいなかった。学校の勉強に困ったことはなかった。算数が好きで、授業中の章末問題を1番に見せに行くのは避けて2番目に持って行く。でも自分の中では1番に終わらせていたかった。

家の目の前の小学校グラウンドでいくらでも遊べて、その頃からサッカーをやっていた。なのに弱小サッカーチームで(泣)。一度試合でキーパーをした時は、ボールをもって攻めてくる子のシュートを打つ距離がわかった。このタイミングで出れば、絶対にゴールに入らない。「ゾーン」に入っていて、バンバン止めた。試合後、相手のコーチに「君、すごいね。うちのチーム入ってくれない?」と言われたことをよく覚えている。

中1の頃の成績は一桁だったが、中2あたりからやんちゃな感じになって、全然勉強しなくなった。その後、やんちゃがあだとなって、思いもよらず心身ともにショックを受けたことがあり、高校から極真空手の道場に通うきっかけになった(笑)。

—中2で出会った先生

中学の時には、言うことを聞かず、やんちゃな感じだったので、先生から鬱陶しがられていたと思う。でも中2の時に、他から赴任してきた若い女性の先生に、初対面でどしかれて、逆にその先生のことをリスペクトするようになった。先生が叱る本気度を感じ、今まで怒られて当然のことをなまなまにしていたことを思い出し、「ああ、そりゃそうだろ。忘れていた。いかんことだった。」と猛省した。面倒見が良くて、手書きのクラス通信を頻繁に出し、自分たちを「見てくれている」と信頼できる先生だった。その体験は今も自分のどこかに残っていて、今は、当たり前のことや常識がわかっていない、忘れていた子には思い出させてあげようという気持ちでいる。

—高校で出会った先生

僕が教員になりたいと思い始めたのは高2の頃。地元の公立高校の書道部に所属していたが、顧問の先生をリスペクトしていたから。それまで「先生」というのはどちらかというと嫌いで、目にも入っていなかった(中2の担任は別で)。言葉にしづらいが、全部受け止めてくれた。その先生にはまだとんがっていた自分の思春期の悩みをなんでも話せた。ある時、扇子に好きな書体で好きな一字を書く創作があり、波状の紙にどう芸術として書いたら良いかさっぱり分からなかった。それでも先生に褒められたい、驚かせたいという気持ちから、小学校の時の書道教室の先生を

久しぶりに訪ね、アドバイスをもらいに行った。その合同作品展は別の学校に好きな子がいて、いいところを見せたい気持ちもあった。それらが大き



今回のために書いてくださった書心

な原動力になっていた。授業に関しては真面目でも優等生でもなかったけれど、書道のことはきちんとやりたかった。祖父母に倣って夏休みには毎日写経をしたし、当時の文部大臣奨励賞をもらったこともある。

文化祭の時も書道部が一番目立つことができた。当時僕は生徒会長をしていたが、いわゆる「真面目」君ではなく、文化祭を盛り上げようと立候補した。それで文化祭のメイン企画に書道部のパフォーマンスを行った。書道の先生のアドバイスも大きかった。紙を繋いで25mくらいの紙を作り、そこにモップを何本かくっつけた大きい筆で書く。今でいう書道パフォーマンスだが、当時はそういうものではなく、僕らの代で初めて取り組んだ。校舎からみんな見てくれていた。

—大学(学部)選び

それまで「先生」というと苦手な人が多かったけれど、どこかに「教員」になりたいという思いがあり、志望を「教育学部」にした。高校生からすると、将来何になりたいかなんてなかなか見えない。世の中の多くの人是一般企業に勤める中で、教員や医者というような生徒が実際に接する職業はごく限られている。将来を考えた時に、「医者」や「教員」という選択はよくあることだと思う。実家から予備校は遠いのと、一人暮らししたいって気持ちもあって東京で一浪して、東京の大学へ進学した。

—大学生生活

高校数学科の杉浦先生の後輩で数学専攻だったが、本当に数学が好きな学生と、その恩恵に預かっている学生に分かれていた。僕は後者の方。大学公認の100人規模のテニスサークルに入り、練習も週2はあったが、僕はそれ以外の活動の方で「勉強」して、在学中ラケットを買わなかったタイプ(笑)。そのサー

クルの出身者にはすごい先輩も多くて、そういう人は本当に活動的。いろんな人を巻き込んで盛り上げる力、みんなでやろうぜという気持ちにさせる力が圧倒的だった。そこで、人を楽しませたり、盛り上げたりすることに憧れがあった僕は宴会部長になった(笑)。

バイトは家庭教師や居酒屋、カラオケ屋など、たくさんした。サークルで代々引き継がれている鳶・塗装バイトがあって、どんな仕事でも日当1万5千円。基本辛い。理不尽の塊のような親方だったが、鳶は体幹が重要なんですごく可愛がられた(笑)。塗装の仕方にも身についた。記念祭などで担任したクラスが色塗りをする時には、最初に基本を教えるが、特に中学生には失敗もさせないといけないと考えているので、あまり最後までは手を入れないようにしている。

一就活

大学の先生に、「教員になるなら、一度学校から社会に出て、広く社会を見てからなりなさい」とアドバイスされた。そこで名古屋にある製造業に就職し、ハード作製の部署へ配属になった。回路なんてひいたことのないのに、ソフトをプログラミングする人と協力してROMを基盤に入れて、こういうパターンでLEDを光らせるとかやっていたが、素人なのでよくコンデンサを爆発させていた。深夜までやって、爆発させて、数時間無駄にしたりして。そんな生活を2年くらい続けた。その後、仲のいい先輩の起業を手伝うことになる。「デバッグ」という作業を専門にした下請けの会社で、いわゆる隙間産業。企業周りの飛び込み営業などもして、実際に契約をとったこともある。

一教員への転職

社会人3年目の夏頃に教員になろうと思ったが、タイミングが悪く、公立の採用試験は終わっていたので人材バンクに登録をした。公立中学校の非常勤を2校経験し、その間に教員採用試験と、私学の適性検査も受けた。結局東海と名古屋市から採用をいただくが、サークルの同期に東海OBが3人いて、どんな高校かは聞いて知っていたし、女子の指導が苦手だったこともあって、東海に就職。東海に来た時は、好きなようにやらせてもらえて、こんな社会人生活があるんだなって思った。

一社会人を経験してから教員になって

社会人としての責任感は備わったと思うが、正直なところ良かったのかどうかははっきりわからない。メーカーの時に付き合いがあったのは下請けだけで、社会勉強という気がしなかった。ものづくりや設計の企業、たとえばトヨタを希望している生徒の相談にはのれるかもしれない。自分が設計したものが世に出ていくという達成感を伝えることはできると思う。

一東海に来て

それまでに比べて、周り(生徒や先生)にそんなに気を遣わなくてもいいし、ギスギスした感じもなく、のびのびしていて、人間関係に寛容性があって居心地が良いと感じた。東海に所属する生徒なり、教員なりは自分たちで常識をわきまえながら、好きなことや自由を自然と勝ち取っていつている。賢い場所だと思う。

一担任

中1を3年連続で担当し、その続きで6年間持ち上がりも1回経験した。中学と高校ではルールも違うし、自分の軸足をどこに置くのか?と考えて、指導法をスライドさせていった。例えば、中学の間はどこかで常識が通じなかったりズレていたりするのを直し(自分が中学の時に気付かされたように)、気づかせてあげる場面があるので、必要に応じて行う。高校になると保護者も含めて、目標の一つとして大学入試というものに収束していくので、三者の目的が一緒になっていくと話をしやすくなる。高3の時は教師という立場ではあっても、メンタル的には「同志」のようだった。

東海4年目に中2の担任をした時の3月に結婚をして、そのクラスメイトと陸上部の生徒を結婚式に呼び、生徒にも祝ってもらった。妻も教員で、結婚式に参列してもらうのも教員ばかり(笑)。出会いは私立教員が集まる青年協新歓。悩みを共有したり、授業、父母とのやりとりなどを相談し、交流する会の中で知り合った。

今でも持ち上がった学年の生徒が学校に遊



びに来てくれると嬉しい。その学年の卒業式は普通に終わったが、その後の学年企画の最後に、生徒が担任の先生は壇上へ、と言ってサプライズで感謝状をくれた。陸上部の生徒だったが、感謝状を渡された時、物心ついてから初めて泣いた。自然と涙が出てきた。それまで泣くとか意味がわからなかった。痛いとかでも泣かなかったし、どうやったら泣くのかかわからなかった。その時は我慢できなかった。そこから涙腺がバカになって(笑)。

一陸上部顧問

公立中学勤務の頃から陸上部の外部指導者をしていて、東海1年目から顧問に。当時、全国大会レベルの生徒がいて、初年度から全国大会に引率をしていた。そこから全国4位に2回なったりして、しばらく短距離が強かった。愛知県でリレーといえば東海、という黄金時代があった。その頃は僕も若かったんで生徒と真剣勝負して、全国大会に行く中2の生徒に負けてしまった。全国大会へは、男子100mであれば、県大会の日までに標準記録の11秒35(当時)を切れば出場が決まる。ただリレーだけは県大会で優勝しないといけないため、決勝は全国に行くかどうかで、本当にドキドキ。バトンのミスで全然変わってくる。余裕で優勝できるチームでもバトンでミスって全国に行けないことも。県大会の舞台裏では、悔しくて泣いている子や、最後の最後で標準記録をギリギリ切る子がいたり、リレーのバトンミスで走れなかった生徒が憤慨していたり…。東海の陸上部に来たときからすでに、ご自身も陸上経験者の松本先生の指導で部活として完成していた。すごい世界を見せてもらった。

最近、自分自身が部活に顔を出せなくなっているのだが、当時は部活に来られなくなった生徒やサボっているうちに来られなくなった生徒がいて、授業の時やどこかの廊下で会った時などに、「そろそろ行こうぜ」と誘っていた。参加しづらくなっている生徒の気持ちがよく分かる今日この頃。

一この先の自分の目標

以前は記録会などに一緒に出て、市民スポーツ祭にも2回出た。3、4年後には、マスターズにも出たい!そして31歳で出したベスト記録(11秒88)を更新し

たい! と思っている。ただ、やり続けていないと体も重くなるし、年齢とともに回復するのに時間がかかる。自分が思っている「100%の力」はなかなか出せないし、そこまで持っていくのが大変だが、目標にしたい。

一教師として気をつけていること

生徒の可能性に蓋をするようなことはしたくない、と思っている。進路選択を方向づけることも極力しないようにしている。僕が担任した時には子どもの意向に任せるという保護者ばかりだったが、もし保護者と生徒の意見が違うなら、両者に声をかけて話し合うように伝えるし、生徒の志望理由を知っているかも聞いて、親子で擦り合わせるのが良いと思う。当時のセンター試験終了後、ある生徒に時間をくださいと相談され、生徒と二人で全国の大学を調べ直し、少しでも希望に合うところを4時間かけて話しあったこともある。

一数学が苦手な生徒へ

例えば、新しく手に入った道具は、使い方を覚えて、使う練習をして、十分に使えるようになって…。これが基礎だと思う。そこから、色々道具が揃ってきたし、この場面でも使ってみよう、ってやっていくものかな、と思っている。数学も最初は定義を覚えて、それから解き方を理解することが基礎。だから道具の説明書を読む段階でシャットアウトしていたら何もできない、ということ。僕は新しい分野の最初の導入を、抵抗なく、上手にできたらいいな、と思っている。演習は演習で必要なので、授業時間内に演習までいくのが目標。僕は高校卒業後に、予備校の物理の先生に基礎・基本が大事であることを教わり、実感した。

一高フェスについて

高フェスとの関わりは4年前から。愛知私教連の自主活動部というところの担当になった。そこで、いわゆる高フェス(高校生フェスティバル)の顧問に。そこにくる子たちのなかには、学校に居場所がなかったり、家庭の事情で家庭にも居場



所がなかったり、自己否定感の強い子も少なくない。彼らは自発的に発言する場合もあるが、こちらから意図的に発言の機会を与えて、聞いてますよというリアクションを見せて、だんだん話してくれるように導くような時もある。高フェスはそういう子たちが気軽に友達を作れる場であり、発言を許される場、意見を言える場。一緒に活動してくれる仲間がいる、そういう包容力がある団体。高フェスでは基本的に実体験を通じた学びをしていて、僕がいた時には戦後75年の節目でもあったので、「自転車ピースリレー」という大きな企画があった。実際に戦争体験された方に話を聞いたり、愛知で戦争の跡がまだ残っている場所（例えば空襲の跡など）に行ったりして、悲惨なことが愛知でも起こっていたことや、決して昔のことではないことを改めて生徒と一緒に学んだ。語り継いでいかなければならないことを、言葉では知っていたけれど、「なま」の実体験として学んでいくことは大切だと強く感じた。そして、私自身も多くのことを高フェスで学ばせてもらった。それまで生徒に勉強以外の部分を感覚で教えたり、伝えたり、アドバイスをしていた。高フェスでは、何を彼らに伝えなきゃいけないのか、何を先輩として語らなければならないのかがはっきりした。



生徒と一緒に走った
自転車ピースリレー(2020)

一高フェスの中の東海生

高フェスの中心で学ぶ生徒は様々な社会問題について自分で考え、自分の見解を持つようになる。僕が授業などで戦争と平和とか、ボランティアについての話をたまにしても、東海生はどこかで照れて茶化すところがある。でも東海生でもそういったことに興味がある生徒はいて、男同士の中では真面目な話や、戦争と平和の話がなかなか本音でしづらいというのがあって、それが高フェスに行けば思いっきり本音で話ができる。今も思いっきり学んで楽しんでいる生徒がいるが、東海で憲法の話をするとうんざりになると言っていた。

一教員代表になって

3月から肩書は変わったけれど、まだ「代表」にはなれていない。前教員代表(北村雅臣先生)がすごい方だったので、同じようにはできないと思う。もちろん頑張るが、凡人の僕が全部できるとは思ってないので、周りの人にしょうがないなと思ってもらって、自主的に協力していただければありがたいです(笑)

北村先生より:先日、代表バトンタッチの会があって、笠行先生がすごくいいお話をされた。最初の新任挨拶はかなり緊張するもの。少しカタクなった(!?)笠行先生の姿を見て、集まった教員の皆さんが前のめりになり、「頑張れ、頑張れ!」と応援する雰囲気を感じた。それは仕組みだけでなく、自然とそういう雰囲気に。これは笠行先生の人柄のなせる技。「至らない点をみなさんに支えていただけることを、心強く思っている」と率直にお話しされ、大きな期待と支援の拍手が贈られた。

一お休みの日・趣味

休みは家族でキャンプに行くが、できればソロキャンプをしたい。夢は1週間、無人島ソロキャンプ。焚き火が好きで、火をおこしてパチパチしているのを見るだけで、何にも考えずにぼーっとすると幸せ。季節問わずに冬も焚き火だけでもしたい。海だったら、釣りして釣った魚を捌いて食べるとかやりたい! やったことないけど(笑)。忙しい時、短時間でリフレッシュできる方法があれば、皆さん、ぜひ教えてください!



家族との大切な時間

編集後記

取材は代表就任直後の3月でしたが、5月の父母懇談会という大きな行事を無事に終えられた時には、心底ホッとした表情をされていました。今回惜しくも掲載できなかった多くの経験談や、私が目にした高フェス生徒との接し方から、少年のような無垢さと、書にも表れているように心のど真ん中に愛があって、絶妙なバランスの繊細さと大胆さが同居した、噛むほどに味の出そうな先生だと感じました。私にとって最後の先生インタビューは大爆笑で締めくくることができました。ありがとうございました!